

芸術実践者のための研究方法論Ⅱ：マルクス主義（後編）

梅 田 力

星槎道都大学研究紀要

美術学部

第3号

2022年

芸術実践者のための研究方法論Ⅱ：マルクス主義（後編）

梅田 力

キーワード マルクス主義 研究方法論 芸術実践 Practice-led research 美術教育 中観思想 龍樹

要約

芸術実践者のための研究方法論の研究。第2回はカール・マルクス（1818-1883）の残した思想・哲学を基にして展開されてきた「マルクス主義」を取り上げた。前編ではまず、マルクス主義と芸術実践の繋がりを説明する必要があると考え、マルクス主義を取り上げるその理由を述べた。後編となる本稿では、具体的にマルクス主義の方法論を取り上げ、最後に著者自身の実践を参考にして仮の研究テーマを設定した。また、本稿ではマルクス理論の中でも、その根幹を成す「史的唯物論」（弁証法的唯物論）を中心に上げ、必要に応じて、その他の理論にも触れる形式をとり、芸術実践者がこの方法論を導入するかどうか検討できるものを想定して執筆した。

広がり続ける社会的格差、深刻化する環境問題、ベーシック・インカムの導入が議論されるなど、資本主義が生み出しているとされる社会の歪みと、その限界が叫ばれて久しい。こうした時代の中、資本主義への鋭い批判をしたマルクスの思想を再検討することは有意義である。また、社会問題を積極的に扱う傾向にある現代美術において、マルクスの思想は多くの示唆を芸術実践者に与えてくれる。

科学的社会主義と言われる、マルクスの世界観の根幹を成すのは、弁証法的唯物論である。これはフォイエルバッハの唯物論と、ヘーゲルの弁証法を参考にし、最終的にはそれらを批判する形で、作り上げられたマルクスの世界観である。この世界観から、人間はまず何よりも衣食住が必要であり、そのために人間は自然に手を加え、生産する事で、生きる事ができる。そして、この生産（経済）活動という土台（下部構造）の上に、我々の思想や政治、文化そして芸術が成り立つ（上部構造）とマルクスは考える。

マルクスの理論から芸術を眺めると、造形や構成を絶対的に追求する芸術理念と正面衝突を起こす。また、作家の思想や作品を経済的背景から分析していくため、構成や色彩、様式や美術史、図像学的なアプローチとは違った見方や解釈が行われ、それらの価値や作家の位置付けが変わる事を示唆するのが、マルクス主義の特徴的な方法論と言える。

はじめに

星槎道都大学研究紀要第2号（2021）、芸術実践者のための研究方法論Ⅱ：マルクス主義（前編）¹で示した通り、ここで考察される「マルクス主義」は、芸術実践者がその制作を通じた研究活動のために、マルクス主義の基礎的な考え方を理解し、方法論の1つとして必要に応じて使用出来るようにするためのものである。そのため、マルクス（エンゲルスを含む）の世界観や、彼が世界をどう見たか、またどのような哲学に立脚して思想を築いたかを知ること。そして、その視点から芸術実践を考察することで、自身の実践を違った側面から見直し、最終的

には制作や、制作を通じた研究に生かしていく事を念頭に置いている。つまり、当然のことではあるが、決して現代社会の問題を資本主義の限界として分析する、あるいは共産主義を見直すことで新たな社会の可能性を提案するなど、社会学や経済学の問題について語ることはない。

マルクスは芸術活動を、天性の才能を持った芸術家が行う創造的な活動といったようには考えず、「労働」の一形態であるとさえ考える。こうした彼の視点から芸術実践を見ていくと、どういった面が浮かび上がってくるのか。思考の枠組みを再検討することで、芸術作品が、こ

¹ 梅田 力「芸術実践者のための研究方法論Ⅱ：マルクス主義（前編）」星槎道都大学研究紀要第2号（2021）pp155-159

れまでとは違った側面を持つ事が明らかになり、自身の実践に全く違った視点を提供してくる可能性があるということである。

マルクスの残した思想は示唆に富み、書き残した著作(後年に彼の研究者達が明らかにした手稿も含めると)も膨大であることから、その全てを隈なく取り上げて、ここで考察していくことは、芸術実践と研究の両方を行う芸術実践者には難しいし、それは専門の学者の仕事であろう。そこで芸術実践者である我々は、解説書等を参考に、まずマルクス主義の根本概念である「史的唯物論」を考察し、必要に応じて、その他の諸概念を簡単に見ていく。そして、マルクス思想の全体像を見渡しながらか、そのほかの諸概念を必要に応じて、各自がさらに深めて研究していけるように簡単に明示しておく事が、より実践者にとっては有用であろう。そして最後に、マルクス主義の方法論を使い、芸術実践者でもある著者自身の制作を考察して、その中で想定しうる研究テーマを仮に定めてみる。読者はこれを参考に、自身の研究テーマの設定や、方法論の検討に役立ててもらえれば、著者として幸甚である。

経済的基盤と芸術の関係

18世紀に起こった産業革命によって支配的となった資本主義社会が生み出す格差に疑問を持ち、マルクスはその原因を経済の面から精緻に分析をしていった。その眼差しは、自然と社会の在り方、人類の歴史や、さらには我々人間の基本的な構造にまで及ぶ。そして資本主義の抱え持つ問題点を暴き出し、どのような未来へ向かうのかを説いた。彼の築き上げた思想は経済という枠では収まりきれない、1つの体系的な哲学であり、その壮大な思想はマルクス主義と呼ばれている。

21世紀となった今、産業革命に匹敵する、あるいはそれ以上の大きな変化をもたらすとされる情報革新により、資本の一極集中と格差は、マルクスが生きた時代以上により深刻で急速に広がっている。一部の資本家の富

は、今では国をも凌駕する勢いである²。

深刻さを増す経済格差に加え、優先される経済合理性が、様々な環境破壊を引き起こし、地球の環境問題悪化は深刻さを増している。こうした現代の抱える問題が、この資本主義や自由経済と深く結びついていると考えられ、システムのな変革も叫ばれている。こうした中、150年以上前の著作ながら、資本主義が本質的に抱える問題点を鋭く批判したマルクスの思想は再び注目されている。現代社会が直面する深刻な問題に、示唆をくれる可能性が指摘されているのだ³。

歴史を振り返ってみると、芸術も資金的な援助が受けられる所に生まれてきたと言える。そして、より潤沢な資金が集まる所に、文化が発達し、芸術も興隆してきた。古くは宗教(教会)が芸術家に制作の場を提供し、次いで王侯貴族、その後は商業的な成功を収めた富裕層が芸術家に活動の場を与えてきた。また地理的に言えば、戦前まではヨーロッパがその中心であり、その中で覇権を握った国々が入り替わりその時代の芸術を生み出してきた。そして、戦後から現代にかけてはアメリカが芸術の覇権を握っており、近年では中国が存在感を増している。現在では、欧米に加え、オイルマネーで潤う中東にもスーパーコレクターと呼ばれる人が存在する⁴。まさに金が集まる所に、芸術が生まれてきた事実があり、美術史と世界史が切っても切れない関係であることは明らかであろう。

こうした強大な資本による芸術作品売買の流れは加速を続けている。盛んに行われている美術品の巨大オークションがそれである⁵。作品は所有し、コレクションするだけでなく、投資の対象としても売り買いされている。さらに、世界中のギャラリーが集ういくつかの大型アートフェアやビエンナーレでは、“閉じられた”、超富裕層だけが参加しうる、極めて煌びやかな世界のような⁶。また、デジタル時代に対応したNFTアート⁷と呼ばれる仕方でデジタルデータさえも所有する方法も現れており、アートと金の関係は、際限がなく、エスカレートしている。そして、それを表現の1つとして、ギャラリーを介さず、直接オークションに作品を出したデミア

² OXFAMの調査結果「最も裕福な富豪男性22人の総資産は、全アフリカの女性よりも多い」(著者訳) <https://www.oxfam.org.uk/media/press-releases/worlds-22-richest-men-have-more-wealth-than-all-the-women-in-africa/>

³ 資本主義を見直すべきだと主張する次世代を担う研究者として、斎藤公平(経済思想家・大阪市立大学准教授 1987年生まれ)が挙げられる。

⁴ 小崎哲哉「現代アートとは何か」河出書房新社 2018

⁵ 世界的なオークション会社としてサザビーズ(Sothebys): <https://www.sothebys.com/en/>や、クリスティーズ(Christies) <https://www.christies.com>が挙げられる。

⁶ 小崎哲哉「現代アートとは何か」河出書房新社 2018年 pp24-64

⁷ NFTアート Non Fungible-Tokenの略。デジタル作品と仮想通貨を組み合わせ、デジタル上で“オリジナル作品”(データ情報)を保有する事が出来る仕組み。

ン・ハースト、こういったアートの巨大ビジネス化の流れに反発するバンクシーといった作家もいる⁸。

資本主義社会の中におけるこうした現代の芸術の流れは、マルクスの分析によれば当然の帰結であると言えるが、では果たしてマルクスはこの資本主義に対してどのような世界観から、どのような分析を行ったのだろうか。

史的唯物論

マルクスの思想の根幹を成す世界観（パラダイム）が、「史的唯物論」である。この概念の中に、上部・下部構造、人間の階級闘争の歴史が見出される。また、資本主義的な社会を分析する中で、剰余価値、搾取、労働疎外、物神性等、様々な概念を彼は暴き出した。これらの概念から、様々な研究（方法）の参考になり得るが、まず研究を進める上で重要な、方法論を支える世界観（パラダイム）である「史的唯物論」から考察していく。

「史的唯物論」は、ヘーゲルの弁証法と、フォイエルバッハの唯物論を批判的に継承する事で生まれた。マルクスは、我々の根本は物質であるという状態をまず認め、物質的条件が人間（の精神）を規定すると考える。この説明だけでは理解が難しいので、一般的な観念論と比較しながら考えていく。

観念論では、人間は自由意志を持ち、その自由な精神によって考え、理性的に生きる存在であり、我々が生きている世界は、その認識主体であるわれわれ人間が精神によって描いている世界であるとする構築的で主観的な立場をとる。

この一方で、マルクスはこの主観的に世界を認識しようとする事を退け、自然科学的な存在論に立脚する。我々の認識の外に客観的実在は存在し、それは人間存在に先立つとする世界観を根本に据える。そのため、科学的であると呼ばれる。しかし、マルクスは単に科学的であるばかりでなく、その自然科学的な客観的実在を不動のものとは捉えず、相対的である人間の精神が、その認識の及ぶ範囲で客観的実在を理解しようと試みていると考える。つまり、その絶対的実在は、相対的人間の認識によって捉えられると考えるのである。そのため、その世界認識は間違いうるし、「発展、運動が絶対的である」⁹という立場をとる。この点において、唯物論を主張した

フォイエルバッハと違い、また止揚的なヘーゲルの思想を取り入れている。彼の史的唯物論は、ヘーゲルとフォイエルバッハをただ継承したのではなく、唯物論は本質的に弁証法的であると考えたのだ。彼は、物質の最小単位について解明するのは、科学者の仕事であると考え、それ以上立ち入らない。それでも、物質がまずあることを前提とし（それがどういふものかは現段階では不明であるが）、さらに理論を積み上げていく。

人間は、自由意思を持つ理性的存在である前に、自然の中にいる。そしてその自然を突きつめていくと、物質にたどり着く（それがどのような物質であるかは問わない）。その中で人間はまず何より生きなければならない。生きなければ、思考をすることも出来ないのである。そして、生きるためには、自然を何らかの手段で加工し、衣・食・住の必要な形に変形させる。これを「生産」と呼び、何よりも先立つものだと考えた。そして、生産をするために行う活動を「労働」と呼び、その上に、芸術を含めた、文化、政治、宗教等あらゆる活動が構成されると考えた。そして、この生産活動を停止して生きること（考えること）は出来ず、あらゆる活動の基盤にはこの生産があると述べた。

このような構造を、建物の比喩を使いながら、下部構造（Base）と上部構造（Super Structure）と呼んだ。下部構造は物質的にどれだけ生産を行なっているかという経済的な状態。そしてその経済的な土台が、思考を規定し、芸術や政治はその上で形作られると考えた。

さらに、人間とその他の動物との大きな違いは、ただ命を繋ぐ動物に対して、人間は目的を持って自然を加工し、そして「より良い」環境を作り出す。そして、その作り出されたより生産的な環境の中で、さらに生産力が高まっていく。こうした発展的な所に、人間の自然との関わりにおける特徴があると考えた。また、この上部・下部構造は、双方向的であり、下部が一方的に上部を規定するだけでなく、上部にある文化や政治が、下部の生産様式に影響を与えると考えた。

マルクスの生産に対する分析は、自然からの生産に留まらない。彼の分析は社会における人間のあり方にも言及していく。人間は本質的に社会的な存在であるとマル

⁸ *デミアン・ハースト（HIRST, Damien）：英国生まれ（1965～）YBAの中心的存在。現在、世界で最も商業的な成功を取めている作家である。

*バンクシー（Banksy）詳細不明：覆面アーティストとして、世界中の壁等にグラフィティ作品を残す。

⁹ 向坂逸郎「マルクス経済学の基本問題」岩波書店 1962 p14

クスは主張する。人間は道具を使い、自然を变形させ、生産する。その道具は、自分で作るだけでなく、他人が作ったものも使う。さらにその他人は世代を超えたもの（つまり前の世代が残した技術や知識）である場合もあり、人間は様々に相互に関わりあひながらより良く生きんとする存在となる。

こうして、唯物論は本質的に弁証法的であり、人間はただ命を繋ぐだけでなく、相互に関わり合いながら、生産環境を発展させていく。この発展が人間を歴史的にしているとする。

史的唯物論で指摘された、もう1つの重要な概念が、階級闘争の歴史である。人間の歴史はこれまで、階級闘争の歴史であったとマルクスは主張する。古くは奴隷制度、中世封建制度、そして近代資本制度と、支配者と、被支配者の階級に分かれ、この階級間の闘争が絶えず行われ、支配階級の体制を打ち壊すことで、発展してきたのが人間の歴史であるとマルクスは主張した。そして、現代の資本主義体制社会は資産階級（ブルジョワ）と労働者階級（プロレタリアート）に分かれており、ブルジョワによる支配は、やがてプロレタリアートによって倒され、共産主義的な社会が訪れると予想した。彼の思想は、いくつかの国で実践されたが、いずれも成功したとは言えず、21世紀になった今も彼の予想した未来は実現していない。それでも、本稿の冒頭で示した通り、現在では資本主義の限界が叫ばれ、環境問題も含め、資本主義のシステムを見直すべきだという論調を無視できない所までできているのは事実と言えるだろう。

マルクスの視点から見る芸術実践

次に著者自身の芸術実践を例に取って、マルクスの思想（特に今回扱った史的唯物論）から制作を見つめ分析し、最後にそこから考える研究テーマを提示する。

史的唯物論的立場に立てば、経済的な基盤（下部構造）の上に、芸術が成り立つ（上部構造）。また、上では特段取り上げていないが、上部・下部構造の概念から発展し、マルクスは、芸術は「イデオロギー」の一形態であると主張した¹⁰。芸術はこのイデオロギーの性質によって、自身の属する支配的な階級を正当化し、持続させる。反対に革命を起こしたい側からすれば、支配階級の力を弱体化させ、転覆させるといった要素を持っている¹¹。

例えば、古墳時代の権力者が、自分の力を誇示するために古墳を作る。ナポレオンが、ジャック＝ルイ・ダ

ヴィッドに自身の理想的なイメージを描かせたのと同じように、会社のオーナーが、自身の肖像画を工場に飾るのも、同じと考える。会社のイメージを表すような美術作品を社内に展示する事も、もし無意識的であっても同じ理由だろう。また、資本主義と共産主義どちらの問題点も痛烈に批判したジョージ・オーウェルの小説、後にアニメ化・映画化された「動物農場」は好例である。

美術教員が描くイデオロギー

筆者は抽象芸術への探求を20年ほど行って来た。制作を本格的に始めた初期の頃にはジョアン・ミロ、ジャン・ミシェル・バスキア、ウィレム・デ・クーニングといった欧米の作家に強く影響を受けた。そうした出発点から発展し、芸術の純粋性や絶対性とは何か。芸術とは何か。在るとは、生きるとは何かといった哲学的な問題について制作を通じて考究することに関心を抱いてきた。

こうした関心はやがてジャンルを超え、E・ハンスリックの説いた絶対音楽の美学や、日本の茶道の持つ還元的な抽象性やその精神に興味を持ち、その美学・思想を研究してきた。そして現在では、その根源をさらに追求しようと考え、特に茶道の精神的根源となっている禅、さらにその禅が影響を受けた仏教の般若経の世界観に関心を持った。現在では、特にその般若経を哲学的にまとめたとされる龍樹の中観思想へ辿り着き、現在では制作実践を交えながら、その研究を行なっている。また、近年では老子の「道」の概念もどこかで繋がるのではないかと感じており、東洋思想と自身の制作に関連性を見て、制作を通じて研究を続けている。

こうした言わば哲学的、基礎研究的な問いを、最も重要な制作動機の1つとして制作を続けてこられたのは、筆者に作品を商品として売らずとも、生き・制作していきける経済的基盤があったからである。かつては高校の美術教員として、現在では研究者・教育者として大学に席を置き、作品の売れる、売れないに関わらず、ある一定の収入を得ながら制作・研究を続けられる環境があり、そうした状況が、言わば基礎研究的な活動をしていても、経済的には問題がなく、活動を継続してこられたことは、疑いようがない。

こうした教員として経済的基盤を確保した上で制作をする表現者、特に大学機構に守られながら作り・語られ

¹⁰ Anne D'Alleva 「Methods & Theories of Art History」, Laurence King publishing Ltd, 2012 p50

¹¹ (同上)

る芸術は夢物語であると、村上隆は「芸術企業論」で、痛烈に批判している。しかしながら、現実としてまず何よりも生きられなければ、制作ができないので、経済的な安定と制作環境を得る事が出来、かつ社会へも参画出来る教員という職業を選択することは、それが可能でならば、作家の生き残る術としても、選択肢として考えることは間違っていないのではないかと筆者は考える。

マルクスの定義によれば、物質的環境が思考を規定するわけであるが、ではどの程度筆者の思想はこれまでの環境から影響を与えられてきたのであろうか。また、それは美術教員という経済的基盤を持ちながら制作を続ける作家には、どこか共通する固有のイデオロギーが存在するのだろうか。また、こうした経済的安定の上で表現を試みることによって、失って来た芸術的に重要なイデオロギーはあるだろうか。またその場合、それはどのようなものであろうか。このようなことを研究していくことは、いくつかの点で有意義な研究となると予想される。

実践者として、マーケットのトレンドに関わらず、比較的、自身の興味関心に従って基礎研究的な制作を出来る事で、(例えそれが夢物語的であっても)、返って表現できる事、取り組める事があるのではないだろうか。少なくとも、マーケットで活躍する作家がいる一方で、すぐには商品化出来ない、基礎研究的な実践を行う研究者が一定数いることは悪い事ではないのではないだろうか。

また、大学教員として、しかも美術科教育の指導も担当する者として、後進の作家・教育者・研究者に、美術教員という経済的基盤の下で制作実践を続けていく、メリット・デメリットが明らかになれば、学生は将来の選択をより明確に行うことが出来る可能性があると考えられる。

参考文献

- 1) 廣松渉「今こそマルクスを読み返す」講談社現代新書 1990年
- 2) 向坂逸郎「マルクス経済学の基本問題」岩波書店 1962年
- 3) 今村仁司「マルクス入門」ちくま新書 2005年
- 4) マルクス研究会年誌（日本における「資本論翻訳史」2017年
http://www.marxresearchsociety.com/_common/doc/yearbook_v1.pdf
- 5) 現代の理論—「日本アカデミズムの中のマルクス経済学—分岐と変貌—
<http://gendainoriron.jp/vol.16/rostrum/ro02.php>
- 6) Creswell, J. W 早わかり混合研究法 抱井尚子訳 ナカニシヤ出版 2017
- 7) 東京藝術大学芸術リサーチセンター成果報告(2008-2012年度)
<https://www.geidai.ac.jp/rc/index.html>
- 8) マルクス, カール著 向坂逸郎訳「資本論」(全3巻) 岩波書店 1969
- 9) マルクス, カール・エンゲルス, フリードリヒ著 古在由重訳「ドイツイデオロギー」岩波書店 1978
- 10) レーニン著, 栗田賢三訳「カール・マルクス」岩波書店 1971
- 11) マルクス・カール, エンゲルス・フリードリヒ, 大内兵衛, 向坂逸郎訳「共産党宣言」岩波書店, 1951
- 12) マルクス, カール著 長谷部文雄訳「賃労働と資本」岩波書店 1982
- 13) 小崎哲哉「現代アートとは何か」河出書房新社 2018
- 14) Anne D'Alleva「Methods & Theories of Art History」, Laurence King publishing Ltd, 2012
- 15) 中村元「龍樹」講談社 2002
- 16) 蜂屋邦夫「老子」岩波書店 2008
- 17) 鈴木大拙「禅」筑摩書房 1987
- 18) 梶山雄一・上山春平「空の論理」角川文庫 1997

Methodology study for Art practitioner 2: Marxism (Second volume)

UMEDA Isao

Abstract

This is the second of Methodology study for Art practitioner series. In this essay, we investigated methodology of Marxism that asserted by Karl Marx (1818-1883) and his successors who had been handed down Marx's ideas and philosophies. The first volume, we validated what is the point that art practitioner should understand Marxism theory and revealed connection to their practice, In this second volume, we investigated more precisely about Marxism thoughts. Finally, with the use of author's art practice, set up draft research question from Marxism methodology briefly demonstrated. In addition, we mainly discussed about his main concept "historical materialism" and the other theories as needed. Art practitioner may be examined Marxism Methodology with this essay before go further study for their own research.

Expanding social gaps, increasing severity global environmental issues and discussing basic income policy those are the indication of the limit and the result of deformed shape of capitalism. In this era, reconsider Marxism which sharply criticized capitalism may be worthwhile. Moreover, the trend of contemporary artists positively manipulates social issue in their expression so that studying Marx's ideas may be suggestive for them.

Dialectical Materialism is the central of his paradigm, and his view is called Scientific socialism. The idea influenced by materialism of Ludwig. A Feuerbach and dialectic of Hegel. Marx critique of the two predecessors and created his own paradigms.

Based on this, he explained the human nature that food, clothing, and housing take precedence. The natures reform somehow for human necessity that is called production. The production (called base) provide politics, ideas and then lie upon culture and art (called super structure).

Marxism paradigms and pursuing pure or absolute form of art, the two ideas collide head-on. Furthermore, Marxism analyze works of art and artists from economic situation rather than composition and color, style and history of art, iconography, hence the value of works of art and artists maybe differentiate from the other analysis that is features of Marxism methodology.